

「慰安婦」に関するアンケート調査

実施日：8月15日（日）

実施場所：靖国神社周辺

対象者：靖国神社参拝の旧日本軍兵士

1) あなたは戦争に行かれましたか？

・行った…42名

ビルマ、トラック島、ラバウル、ハワイ、ハルビン、宮古島、山西省河北、台湾、インドネシア、ガダルカナル、ベトナム、満州、南京、北支、ニューギニア、アンボン、スマトラ、河南、青島、バンコク、サイゴン、マレー、シンガポール、アモイ、上海、レイテ島、硫黄島、ソ満国境、山東省、中支、漢口、ソロモン島、広東（順不同）

・行かない（内地）…11名

九州（宮崎）、三宅坂近くの航空学校で教育、横須賀海軍、中島飛行機製作所、近衛兵、福島に疎開、土浦の海軍航空隊

2) 慰安所はありましたか？ *戦地に行った42名の回答

・あった…34名

・なかった…3名（初年兵、ソ満国境）

・知らない…4名（若かったので、近くにはなかった）

・回答なし…1名

3) 慰安所は必要だったと思いますか？

・思う…35名

- ・はけ口として必要だった。悪い気持ちを起こさせないため
- ・性病予防のため
- ・男は土民の人に迷惑をかけるから（強姦？）
- ・必要悪だった
- ・良いことではないと思ったが、心の慰安は必要。精神的に荒廃しているから、そのはけ口。
- ・軍紀が守れる
- ・若い男は慰安所がなければ欲求不満で婦女暴行が起きる。
- ・戦地には遊ぶところがないから
- ・男は何年も戦地にいれば当然だ
- ・地元の婦女子のためにも必要だった
- ・娯楽が（他に）ない
- ・はけ口がないと現地の人を強姦する
- ・公平な目で見て必要
- ・男として必要
- ・性欲処理のため必要
- ・強姦防止のため必要
- ・男として明日は戦争というときには必要
- ・世界中、どこにもそういう類いのものはあった
- ・地元の婦女子の安全のためにも必要だった
- ・遊びに行ったんじゃない。国のために戦争に行ったんだから必要だ。本当に慰安婦と遊んだのは将校。

・思わない…3名

・回答なし…15名（答えたくない、子供だったのでわからない、戦争に行かなかったのわからない等）

4) 「慰安婦」や慰安所について覚えていること、印象に残っていることは？

- ・女性（慰安婦）に器量の良し悪しがあった
- ・日本の女が良いのではないか
- ・ハルピンは朝鮮人、満人、日本人、白系ロシア人の「慰安婦」がいた
- ・一部の兵隊の中には夜間に娘を強姦する者もいた
- ・朝鮮人の業者が募集して集めた

・休日に曹長が全員にサックを配った

・馴染みになった「慰安婦」がいた。「ジュンコ」という名だった。今も忘れられない。妻にも話していない。

・知人の日本人が料亭で働いている時に「軍の仕事」という募集があった。（それに応募して）シンガポールに行ったら「慰安婦」の仕事だった。「騙された」という手紙をビルマで受け取った。ビルマでは朝鮮人の「慰安婦」を買った。1円50銭だった。引き上げの時、「慰安婦」は「準看護婦」と呼ばれていた。

・軍の命令で業者が慰安所を営んでいた

・慰安所は「ピー屋」と呼んでいた。終戦直後、朝鮮人「慰安婦」にはお金も何もかも渡せる物は渡して国に返した。

・中隊長は慰安所に行っていたが、自分は業務があつて行けなかった。

・前線に行く者は、命がなくなるかもしれないので、皆で慰安所に行かせた。

・戦地では月に2回、慰安所に通った。朝鮮の女性だった。当時は日本も貧しかったので娘を売った。朝鮮の女性も売られて借金を返すために慰安所に行った。1回高くて5円。

・平屋の建物で、2、3ヶ所あった。（ニューギニア）

・今、軍隊の内容がわからない人がいるからいろいろ言っている。韓国人のブローカーが斡旋して韓国の食べていられない貧しい女の人が来た。強制ではない。自分は師団司令部（第123師団）にいて統括する立場だったからよく知っている。軍属扱い。兵隊は毎回、金を払った。衣食住は保障した。

・性病に関して軍医がうるさかった。帰国に際して病気を持ち帰ってはいけないと。だから部隊のものは自分も含めてほとんどが行かなかった。自分は衛生兵だったので、（慰安婦の）予防接種（606号？）は立ち会った。

・フィリピンの女性との混血の人は綺麗だった。日本の女はだめ。

・朝鮮の人が多かった。娯楽がなかった。生死の境にいていつも緊張していた。

・日本人は町にある店で商売していた。将校で金持ちが行った。中隊のあるところのそばに慰安所があつて、金を払っていた。安かった。8・15には日本人女性が部隊に来てくれて洗濯をしてくれた。鉄砲を磨く布を手できれいに洗ってくれた。

・ソ満国境にいた。慰安所には日本人は5人。下士官が買った。朝鮮人は10人いたが、騙されて連れてこられたかは分からない。

・徐州では毎月討伐だった。「慰安婦」は朝鮮人が多かった。駆り出された日本人だってそうだったんだから。

・初年兵は行きたいけれど行けなかった。

・お金を払ってピー屋に行った。

・慰安所の雰囲気は朗らかだった。明日の命は分からないのだから、行きたいのは人間の心理だ。

・九州には朝鮮の「慰安婦」がいた

・自分は童貞だった

・病気を染されたら慰安所は必要ない。病気が染ったのは遊びの好きな人たち。偉い人はいい思いをした。（慰安婦は）お金を貰っている。困って入ったのだから仕方ない。家族のことを思っていた。

・「玉ノ井」慰安所というのがあった。経営者は中国で一儲けしようとした。自分は接触しなかったが、聞いた話では2円か3円だった。女性も金を儲けて帰ったらしい。

・クリスチャンは自制していた

・ソ満国境警備隊だった。慰安所はスパイのため行かなかった。20～30キロ離れた町の慰安所に行くものもいたが、そういうのはチャランポランな人。自分は昇級したかったので休日届を多くしたくなかった。

・朝鮮の女性は「ばかにするな。天皇陛下いっしょ。」と言っていた。

・シンガポールから「慰安婦」も乗っていた帰還船が魚雷で撃沈された。ボートに移るとき、朝鮮の「慰安婦」は自分が先に乗ろうとしたので呆れた。民間の日本人の女や子供がいたので、それを先に乗せろと言った。

・トラック島では「慰安婦」と兵隊の心中があった。

5) 「慰安婦」だった女性に対して、日本政府は謝罪や賠償をすべきだと思いますか？

・すべき…6名

・当時、国のために青春を売ったのだから、しかるべき補償をするべき。

・無理やり騙された人もいる。しかし「慰安婦」だって金（給料）を貰ってやっていたし、兵隊も1人づつ払ったのだから、騙されて連れてこられた人もいるとは思いますが…。無理やり騙されて連れて来られた人

にはしなきゃいけないかも。

- ・当然、すべき。
- ・強制的に連れていったのだから、謝罪や賠償はすべき。もっと早くに何らかの形で…。
- ・強制連行されたことは知らなかった。それが事実なら補償すべきだ。
- ・調べようがない。証拠がない。一人ひとり、外国全部に謝罪すべき。
- ・しなくていい…35名
 - ・日本でなくて大陸（戦地）に行けば金になると業者にのせられていった。
 - ・強制があったとしても仕方がない。満州はすべて好きで入った人が多い。買われてきた。
 - ・日本政府はシベリアに行った人たちに謝罪すべきだ。なぜ、シベリアで苦勞した。
 - ・戦争なのだから
 - ・国民基金をしている
 - ・軍の管理ではなく慰安所経営している人がいた。昔は「ぜげん」と言った。現金だか支払いはしているはず。（兵隊はチケットだったが）
 - ・代金を支払っている。商行為だった。ソ連は満州で日本女性にもっとひどい強姦をして殺した。
 - ・当時はしょうがない。今更。
 - ・給料を貰っていた。自分もお金を払ってやったんだ。
 - ・しなくてもいいと思うが、世論のためにはある程度はしたほうがいいのかもしれない。ただ、世論はでっち上げの元に言っている。
 - ・職業だった
 - ・「日本政府」ではなく、当時の軍の指導者が責任をとるべき。19歳から23歳までの兵士の青春はどうしてくれるのか。
 - ・代償は払っている
 - ・国と国との問題。韓国に対してはすでに国が補償している。
 - ・強制ではない。お金を払っていた。
 - ・謝罪はすでに済んでいる
 - ・一応、謝っている
 - ・日本の遊廓と同じ。自分で進んで金儲けのためだった。
 - ・貧しくてやっていたのだから
 - ・経営は軍ではなく、民間だったから
 - ・すでに謝罪は済んだ。終戦で負けたから。強制ではない。（慰安婦は）日本人の仲間だった。お国のために身を捧げたのだ。韓国は強い国に頼らなければ生きていけなかった。日本人の「慰安婦」だった。同じようにお国のために身を捧げていた。
 - ・今ごろ言っても遅い。自分は8ヶ月、捕虜だった。お金は貰えなかった。よその国の応援ばかり（している人がいる）。
 - ・慰安所は業者がやっていたものに過ぎない。親はちゃんとお金を貰っていたのでは？でなければもっと早く名乗り出ていただろう。日本の弁護士などが叫び立てている部分が大きいのでは。
 - ・日本軍の施設（慰安所）にいる間は安楽だったはず。誇張されるのはいやだ。
- ・分らない…2名
 - ・自分で来た人もいる。強制的に来られた人には払ったほうがいい。
- ・回答なし…10名

6) あなたは慰安所に行きましたか？ *42名中

- ・行った…14名
- ・行かない…19名（倫理的に行けなかった、機会がなかった等）
- ・回答なし…9名

以上

*調査者：26名 聞き取り回収：53名分

*回答は聞き取り・記入そのままの文章を載せてあります。